

# 三田尻 中関港

山口県土木建築部港湾課

〒753-8501 山口市滝町1-1

☎083-933-3820(直通)

URL : <https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/e/a/6/ea61c2124025eb23f9f9e313cd419042.pdf>



## 1. 概況

三田尻中関港は、山口県瀬戸内海沿岸の中央部に位置しており、背後に防府平野を擁し、江泊半島及び向島に固まれた天然の良港を形成している。港内は一般に遠浅であるが、港口付近は水深が10mあり、大型船の入港も比較的容易である。

本港背後圏の防府市は古くから開け、大化の改新(645年)では周防国の国府に定められた。また、天平13年(741年)

には国分寺が建立され、名実とともに周防の政治、経済、文化、交通の中心地として発展してきた。

関ヶ原の合戦後、毛利氏が周防、長門2国に移封されて以後、慶長5年、毛利藩の水軍拠点地として海軍局、海軍学校が設けられるとともに商港も開かれ、軍港、商港として港の原形が整えられた。

特に、毛利氏の「三白政策」と称される米、塩、紙の産業振興奨励策により遠浅の海域の開削事業が進められた。

三田尻地区では、元禄5年から白力および百聞の開削が造成され、これを利用して町人堀に錨地が新設された。また、中関地区も元禄12年から大開削が開始され、三田尻塩を産するようになった。この商取引による船舶の入港が多くなり、遠く江戸、大阪、博多、長崎方面の航路が開かれた。

明治に入ると経済社会の発展に伴い、以前にも増して船舶の出入りが多くなり、山口、萩、島根方面の旅客も本港を経由するようになったが、山陽本線が開通してからは交通・運輸の様態は一変し、港勢は次第に衰退するところとなった。

しかし、明治20年頃から中関地区において中関開港運動が盛んになったので、三田尻地区もこれに刺激され明治24年三田尻築堤株式会社を設立し、堀川口より490mの突堤を築造した。

大正以降、製塩工場や繊維、化学工場が相次いで進出し、活発な港湾活動が展開され、本港は工業港としての性格を強くしていった。

第2次世界大戦に入ると、県は軍の要請により昭和18年から突堤東部の修築工事に着手したが、仮護岸が完成する頃終戦を迎えることとなり、工事は一時休止状態となった。

戦後、工業生産の回復等により、再び本港施設の拡大整備の必要が認識され、昭和35年までに-3m物揚場129m、-4m物揚場120m、-5.5m岸壁160mが完成し、昭和34年6月には重要港湾の指定を受けた。

また、当地域は、昭和39年周南地区工業整備特別地域の指定を受け、廃止された塩田跡地360万㎡を中心とした用地に企業誘致が図られ、鉄鋼関連の古浜中小企業団地に加え、昭和45年にはタイヤ製造業やカーボン工場が進出し、さらに昭和47年には自動車工場の立地決定をみるなど、当地区を取りまく社会経済情勢は大幅な変化を見せた。

こうした臨海部での工業開発の進展等に伴い、港湾取扱貨物量も急激な増加をもたらした。これに対応するため、中関地区に昭和43年から-7.5m岸壁1バースや、-5.5m岸壁4バースの整備をはじめ、三田尻地区に昭和51年から-7.5m岸壁1バース、築地地区に-7.5m岸壁3バース、-5.5m岸壁4バースや、三田尻大橋(橋長476.4m、幅員9.75m)の整備を行った。

さらに、昭和58年にはマツダの国内主力自動車組立工場やその関連企業の進出により、一層港湾物流の需要が高まり、中関地区において-12m岸壁2バース、-7.5m岸壁3バースの整備を行い、その後の貨物量の増加に伴い、上屋2棟、ガントリークレーン2基を順次設置してきたところである。

このように、臨海部工業用地への企業進出により、港湾取扱貨物は平成30年には520万トンに達しており、今後も背後企業の発展に伴って、港湾への依存は高まるものと考えられる。

なかでも、効率的で機能的な公共施設への期待は一層高まるものと思われ、引き続き地域振興の基盤となる港湾整備を図っていくものである。